

文学と真実 レオナルド・シャーシャー『モーロ事件』

橋本勝雄

一 はじめに シャーシャーとモーロ事件

前衛の熱狂が通りすぎ、大衆読者の需要に応えようと個々の作家が模索を始める七〇年代の文学のなかで、作家レオナルド・シャーシャーは、マフィアや政治腐敗など社会現実を告発する小説家として現れる。不完全な推理小説の形式、つまり推理小説のパロディであるポストモダン的な推理小説を利用して、読者の意識を刺激する。シャーシャーの考えでは、一般にジャンルとしての探偵小説を読む目的は、受動的に推理を受け入れて自分の知性を休めるためである²⁾。しかしカルロ・エミリオ・ガッダ以来、探偵小説ジャンルの形式を利用して書かれた一連の「文学的推理小説」は、そうしたミステリー読者の期待に応えるのではなく、読者の知性を刺激する異化効果のために

ジャンルの規則を逸脱する。

なによりシャーシャーの独自性は、前衛運動のような形式的実験とは無縁の古典的文体、文学作品からの多数の引用といった「文学性の高さ」と、ネオレアリズモから受け継いだ社会参加の姿勢が共存しているところにある。ミステリーの形をとりながらミステリーではないし、同時代の社会現実を題材としながらジャーナリズムとも異なる。イデオロギーや政党組織を土台としない自由な個人としての信念を表明しながら、シャーシャーは不明瞭な現実のなかで真実がとりうる形としての文学を主張する。小説『権力の朝』、『トード・モード』は、過激派テロでイタリア社会が大きく揺れた「鉛の時代」の国家体制のゆがみを鋭く暴く作品である。一九七八年のモーロ誘拐事件は、これらの作品でシャーシャーの描いた物語世界が現実化したかのよう

な印象を与えた。小説ではないがこのモーロ誘拐に関する文章が、現代イタリア政治をめぐるシャーシャの「権力三部作」を締めくくる。

一九七八年三月十六日ローマで、極左テロ組織「赤い旅団」とされるグループがキリスト教民主党政総裁アルド・モーロを誘拐する。五月九日にモーロの死体が発見されるまでの五十五日間、イタリア全土が異様な緊張に覆われた。いわゆる「モーロ事件」である。監禁されたモーロは、テロリストとの交渉を行うように党の「友人たち」へ手紙を送るが、キリスト教民主党政と政府は強硬路線を貫いて交渉を拒否するばかりか、手紙の信憑性を疑って内容がモーロのものではないという態度を示す。

モーロは旅団に脅迫されているか、あるいは精神的に混乱した状態にあるとする政府の主張に対して真つ向から反論し、これら一連の書簡はモーロの真の声だと指摘したのが、レオナルド・シャーシャの『モーロ事件』である。

事件後の数カ月後に書き上げられたパンフレットでシャーシャは、モーロ殺害を間接的に黙認した強硬路線の政治家たちの責任を厳しく追及し、実行犯の「赤い旅団」に対して正当化する余地をあたえるところが哀れんでみせる。仲間から裏切られ見捨てられた大物政治家、社会的仮面をはぎ取られた人間モーロに対する同情と共感に満ちている。

その後二十年以上の間、事件の捜査と裁判が進むにつれてさまざまな事実が明らかになり、「赤い旅団」の人民裁判におけ

るモーロの供述書が部分的に発見されるなど、事件について多くの点が知られるようになった。しかし、当時の限られた情報に基づいていてもシャーシャの観察力、読みは非常に鋭い。その基本には、モーロの手紙を「そのまま純真に」読み解くという文献学的視点と、さまざまな文学作品への指示参照という技法がある。ここでは『モーロ事件』のなかにさまざまな形で登場する文学と作家を取り上げて、シャーシャの主張する文学と真実の関係を検討する。

二 引用と参照 エピグラフ好きの作家

『モーロ事件』の冒頭には、「人がふさわしい時に死んだと言ふことほど恐ろしい言葉はない」というブルガリア出身の思想家エリアス・カネッティのエピグラフが置かれている。

エピグラフ好きな作家とそうでない作家に分類するとすれば、あきらかにシャーシャは前者に属する。作品のほとんどにエピグラフがあり、まったくエピグラフがないのは初期の短篇集『レガレベトラ司教区』など数作品に過ぎない。ときには複数のエピグラフが付されている場合もある。ボルヘス、ポー、シェークスピア、モンテーニュ、ルソー、パスカル、ボルジェーゼ、カサノヴァ、ボイアルド、キュリエ、ジュリアン・バンダ、パッツェスキとそこに挙げられた名前は多種多様である。先行作品、作家へと結びつく糸口であるエピグラフを

シャーシャが多用するのは、敬愛する作家スタンダールの影響以上に、その創作の基本姿勢にあるように思われる。書き直しやパロディ、真や偽の引用をよく使う意味を問われて、作家はこう答えている。

今では執筆は不可能です。書き直しなのです。この（おむね意識的な）書き直しには、執筆に至る書き直し（ポルヘス）もあれば、下品で時には卑しい焼き直しもあります。わたしは書き直しをいわば自分の詩学としてきました。それは意識的で明らかなるものであり、下品で卑しいところのない書き直しで、きちんと代価が払われています⁴。

出典を明示するエピソードという形式は、既存の文章の一部を切り取ってきて新たな文脈に置き換える「書き直し」の作業のなかでも、際だって「意識的で明らか」引用である。「真昼のふくろう」のように、借用されたタイトルを説明する比較的単純なものをはじめとして、それぞれのエピソードが置かれた文脈はさまざまだが、まず冒頭のカネットイの言葉に戻ることにする。

この警句の意味は明らかだろう。モーロ誘拐直後から、かれを「偉大な政治家」に祭り上げることによって、民主主義国家のための犠牲者、「ふさわしい時に死んだ」政治家モーロのイメージを政府当局は作ろうとした。そのために、旅団との交渉

を主張する手紙がモーロ自身の意志で書かれたはずがないとみなされた。実際、当時はさかんに「薬物投与」、「精神的、肉体的」強要が喧伝されたが、結局遺体には薬物投与や拷問の形跡は見られなかったし、また公表された書簡が偽造されたという証拠はみつからなかった。そうした先入観からモーロの手紙の信憑性を疑う政治家の態度にシャーシャはショックを受ける。誘拐犯との交渉を可能だと主張していたことをタヴィアーニ議員から否定されたモーロは、自分の党総裁という立場から逸脱してタヴィアーニ議員の右翼的偏向と不明な経歴を皮肉る文章を発表し、ますます党側の不信感を買ってしまう。

唆されたのがあるいは自らの信念なのかはとにかく、現在のモーロの議論は、赤い旅団と同じ、赤い旅団側に立った議論だという主張が、まだ生きていて明晰で意欲のある人間の上に巨大な曇石のようになるのしかかる。まだモーロが「人民監獄」のなかにいる一方で、すでに死んだモーロ、記念像のモーロが記憶され、追悼される。

四月二十五日キリスト教民主党本部で、人民監獄からの手紙を書いているのは自分たちの知っているモーロではないと否定する「モーロの友人たち」五十名の署名の入った文書が配布される。この文書をシャーシャは、カネットイと同じように「恐ろしい、怪物的、非人間的な mostruoso」と繰り返し表現す

る。キリスト教民主党における「友人 amic」が、いわゆる左翼での「同志 compagno」と同じ意味合いをもつことを考えると、これはまさに仲間を否認する裏切りにほかならない。死を前にした人間の文章を疑う態度への強い反発が、シャーシャの執筆の動機であったことを伺わせる。

『モーロ事件』には末尾にもエビグラフがある。すでに小説『トード・モード』において、シャーシャはジツドの『法王庁の抜け穴』の一節を最後に引用したことがある。ここでのボルヘスのエビグラフは、当初冒頭に置かれる予定が最終段階で末尾に移動にされたものだという。作品名までは明記されていないが、『伝奇集』に収められた短編「ハーバート・クエインの作品の検討」だ。

それが推理小説だということはすでに述べた……七年経った今では細かな筋まで思い出せない。わたしのうる覚えのせいで単純化されて(純粋化されて)しまったが、全体はこんな話だ。冒頭に謎めいた殺人が起こり、途中に長々とした議論があり、最後に解決がある。そして謎が解けたあとと長々と回想する文章のなかにこんな文がある。「二人のチェスプレイヤーの出会いには偶然だったとだれもが信じた」。この文から、解決は間違っていたことが感じられる。不審に思った読者は怪しい章を読み返して、「新たな」、真実の解決をみつつける。(J・L・ボルヘス、『伝奇

集』)。

途中の一部と、その後が続く文「この奇妙な小説の読者は探偵 デイテクティブ よりも頭がいい」は省略されているが、これは架空の作家クエインの処女作『迷宮の神』に関する部分ほぼ全体に相当する。モーロ事件の場合でも、最初に誘拐が起こり、交渉か否かをめぐる強硬派と交渉派の議論が五十五日間に渡って続いたあとで、死刑執行という悲劇的解決が提示される。しかしシャーシャはモロの手紙を綿密に読むことで事件を「再捜査」する。ステーフアノ・ターニは、シャーシャの作品を現在の殺人事件捜査をめぐる「推理小説」タイプと、文献を通して歴史的再構成を試みる「歴史調査」タイプに二分している。この『モーロ事件』は現代の事件であるが後者に属するだろう。「だれがなぜ殺したのか」を求めて未来へと行動する警察官や探偵ではなく、「どうしてそんなことが起こりえたのか」を追求して過去へと訴求する歴史家の語り手が探偵役を果たす。ねじ曲げられ無視された真実を取りもどし、権力に押しつぶされた犠牲者の亡霊を呼び起こすこと、そのためにはモーロの手紙に含まれた理性と感情を正当に認めなければならない。もちろん、「なぜモーロのいた監獄を発見できなかったのか」という警察調査の一連の不手際を再検討することも関わってくるが、それは翌七九年にモーロ事件解明調査委員会メンバーとしてシャーシャがまとめた「少数派の報告書」に収められてい

る。

監禁されている場所や人質交換の対象となる政治犯の人数など、モーロの手紙の文章そのものに事件を解決する鍵が隠されていたのに、政治家も警察もマスコミもそれをきちんと読み解くことができなかつたとするシャーシャは、手紙の読み直しにとりかかる。もちろん手紙を「読み直す」という行為はもう一度事件を「書き直す」ことに他ならない。こうして、モーロの言語表現に関心を示した作家、友人ピエル・パオロ・パゾリーニをシャーシャは思い出す。

三 パゾリーニとシャーシャ 千口言葉の変化

『モーロ事件』の冒頭は、三年前に亡くなったパゾリーニに捧げられたオマージュである。一ツ年下のパゾリーニは、シャーシャのデビュー作『独裁の寓話』（一九五二）の最初の書評者だつた。ふたりとも方言詩の研究から出発したという共通点がある。六〇年代両者のやりとりはまばらになるが、七〇年代に入って国家権力批判で意見の一致を見る¹⁰。パゾリーニが七五年に亡くなると、友人の遺志を引き継ぐように論争家シャーシャの言動は積極的になる。ふたりの友情の関係を、シャーシャは距離をおいた兄弟愛に近いものと捉えている。

私にとってパゾリーニは、兄弟のようで、でも離れてい

る。うち解けることなく、恥ずかしさと、おそらくどちらからもやりきれない気持ちで覆われた兄弟関係¹¹。

この文章の裏側には、若い弟を亡くしたふたりの体験が隠されているとアドリアーノ・ソフリは指摘する¹²。一九四五年パゾリーニの弟グイドがバルチザン活動中にユーゴスラヴィア側のバルチザンによって殺された事件は有名だが、シャーシャの弟ジュゼッペは一九四八年に父親の硫黄鉱山でピストル自殺を遂げている。はつきりした原因はわかっていない。「三十年が経ってから文通を再開する」ようにパゾリーニに宛てて文章を書き始めるシャーシャの気持ちのなかには、弟を理解し守つてやれなかつた兄としての後悔の念がよみがえっているようにも見える。

ここでシャーシャが思い出すパゾリーニのエッセイ「ほたるの記事」は、一九七五年一月に発表されたもので、原題「イタリアにおける権力の空白」が示すように、ファシズムの延長であつたキリスト教民主党政権体制の変化を、工業化・都市化が進んでほたるが姿を消した六〇年代初期に重ね合わせて捉えたものだ。戦後からおよそ二十年の間、つまり「ほたるの消失」までは、キリスト教民主党政権はファシズム体制の連続として、農業と原始的工業社会の価値規範（教会・祖国・家族・従順・秩序・儉約）の土台の上に成立していた。「ほたるの消失」後、大量生産・大量消費社会の到来によって、偽善的ながら保たれてい

たそれらの価値規範がまったく意味を持たなくなる。キリスト教民主党の権力者たちは自分たちが権力を行使していると思いつ込んでいるが、逆に「新しい生産と消費の権力」に探られる空虚な仮面に過ぎなくなる。こうした権力の空洞化現象、権力者たちのいる「宮殿」と現実社会との乖離を指摘するパゾリーニは、この一九七五年にキリスト教民主党有力者を断罪する複数の文章を発表する¹³。

この変化の徴候は、モーロらキリスト教民主党政治家の言葉に現れたとパゾリーニは言う。

その過渡期（つまり「ほたる消失の進行中」）に、キリスト教民主党の権力者たちは表現の仕方を急に変え、まったく新しい（しかしラテン語と同じくらい不可解な）言葉づかいをし始めた。とくにアルド・モーロがそうだ。つまり六九年から今日に至るまでに権力保持のため（今のところはそれに一見成功しているが）仕組まれた恐ろしい諸事件に関して（謎めいた相関関係によって）一番関係のなさそうな人物である¹⁴。

一九六九年十二月ミラノのフォンターナ広場の農業銀行爆破から始まる一連の爆破事件には極右組織と秘密警察が関与した疑惑が起こり、七〇年にはクーデター未遂が起きるなど、この時期イタリアの社会不安は高まる一方だった。体制側が組織的

なテロを利用して社会緊張を高めて左翼の勢力拡大を阻止し抑圧的政策を強めようとする「緊張の戦略」が囁かれはじめていた。与党総裁でありながらそうした疑惑に無関係そうなアルド・モーロ自身が、皮肉にも極左組織「赤い旅団」に誘拐されて「国家による虐殺」罪を問われる結果になった。無関係だからこそ、権力の宮殿の一室に一人取り残されたのだとシャーシャは言う。そして監禁されていた二カ月間、自分が作り出した新しい言葉にモーロは苦しめられる。

「言わない」言語を使って、「言う」こと、「自分を理解させないために」採用し工夫してきた手段そのものを使って「自分を理解させること」を「モーロは」試みる必要に迫られた。意志伝達不可能な言語を使って意志伝達しなければならなかった¹⁵。

このモーロの新しい言語とは何なのだろうか。一見、まるでモーロが謎めいた秘密の暗号のような「理解できない」言葉づかいをしているようにも見える。しかしそうではない。「当たり前のことだが、ラテン語が不可解なのは、それを知らない人にとつてだ」とシャーシャは言う。それは「パゾリーニにとつて」不可解だったと指摘する。これはどういふことだろう。時代を遡ってみよう。シャーシャが指摘するように、パゾリーニはすでに「ほたるの記事」の十年前にモーロの言語を政

治言語の例として取り上げている。『異端的経験論』の冒頭にある「新しい言語問題」のなかだ。高速道路開通式の祝辞を例として、かつての美辞麗句や強調の代わりに技術的表現を利用して、政治的アピールをしていることが指摘される。文学言語と同じく政治言語も、ラテン語に近い時代錯誤な人文学的表現を特徴としていたのが、工業化社会の技術的表現と融合し始めたという観察だ。その後の論争のなかで、パゾリーニはこうした変化は初期の段階であり、モーロのイタリア語は基本的にはまだ「弁護士風」の「人文主義」的言語であるとす。

まだモーロのイタリア語には、その人文的素地、ラテン語の理想などが残っているが、そうした情況でも新しいタイプの言語、つまり生産と消費の言語が決定的な役目を果たしているのはあきらかだ。それは効率よく伝達することだけを旨指すのであって、饒舌だとか賞賛だとか説得だとかは考えない。それらの役割は広告のスピーカーが果たす¹⁶。

ここでパゾリーニが描く対立は、さまざま歴史的層が混在していたかつての人文的イタリア語に対する、技術社会の同一化・統合化を受けた新しいイタリア語である。前者が饒舌・賞賛・説得などの「表現」を旨指すのに対して、後者は「伝達可能性」と効率を優先させる機能的言語である。だとすれば、ど

うしてモーロの新しい言葉、パゾリーニにとって不可解なその言葉が、「言わない」言語、意志伝達不可能な言語ということになるのか。この食い違いを解く手がかりは、やはり十年前のシャーシャの記事にある。ちょうどパゾリーニの「新しい言語問題」講演が雑誌に発表された数カ月後、一九六五年一月三十日付けの雑誌「オーラ」に掲載された記事だ。パゾリーニが取り上げたモーロの言葉について、シャーシャは微妙に違う視点から見ていることがわかる。

モーロは南部出身の政治家だ。あたりまえだが、パゾリーニが、ミラノ、トリノを軸として誕生する言語のカプアの証文としてかれの文章を扱う以上、そのことを強調しておいてもよいだろう。南部政治家としての資質をすべて備えているかれだが、なによりも「言わない」才能を持っている。つい最近まで、デ・ロベルトの『ヴィチエ』でフランカラントアの領主が選挙民にする演説を南部の政治演説の古典的モデルとみなすことができた。モーロ議員は天才的に（と認めるべきだろう）、より厳密で、ほとんど科学的なほどの「なにも言わない」言語を生みだした。わたしの記憶違いでなければ「平行線の交わり」という言い回しはかれの創作だ。この表現は、抽象的な論理としても具体的な物事としても、まったくなにも意味を成していない¹⁷。

ちなみに「平行線の交わり」とはモーロが共産党との接近を画策する際に用いた表現だが、ここでシャーシャは、南部政治家の空疎な饒舌の近代版としてモーロの言語を捉えている。厳格で科学的レトリックを用いながらも、意味を持たない言葉であり、自己韜晦を目的としている点は以前と変わりがない。しかしにこう考えれば、『モーロ事件』でのシャーシャの表現は理解できる。人質となったモーロは、自分が生み出した「意味を伝えない」言語に意味を持たせようと苦しんだことになる。それではパゾリーニの視点とはまったく異なるのだろうか。それも言い切れない。「ほたるの記事」の翌年六六年に書かれた「反テレビ論」のなかに、モーロの饒舌についての言及がある。

ファシストの腐敗した遺産であるイタリアをネンニと共産党主義路線に進ませたこと（これはささいなことではない）で、かれ「モーロ」が、時評だけでなく歴史に名を残すのは間違いないし、他の選択肢は名ばかりだったからそれが必要な成り行きだった。ただモーロがそれを成し遂げ、いまも遂行できるのは、「そのことを黙っていた」からだ。公文書・記念式・開幕式における「灰色の」公共性を利用する一方で、かれは下部構造の言語の技術的精髄を利用する。躊躇したり人間らしいそぶりもみせずに、数

十分間もしゃべり続けられる。ただししゃべっているだけ、つまり全体として曖昧に何かを言いそうな気配がある。その要点は、よその場所に置かれた真実、よその場所へと導くもの。として視聴者の頭に残る。つまり、テレビより上位にあると視聴者が考える唯一の場所、権力と責任のレベルにあるものとして⁸⁰。

この時のモーロの饒舌は、技術専門用語や官用専門語を利用して情報を伝達しながら、意味を成した言語を話してはいない。視聴者は権力と責任のレベルから切り離されたままでいながら、それについて厳かに通達される点で、テレビ発表はファシストのラジオ放送と実質的に変わりはないとパゾリーニは主張する。安心させる事柄だけを知らせ、「万事順調」というシグナルだけをたえず送り続ける放送だ。人質となったモーロのメッセージはそうした言語で表現されるわけにはいかない。今度は逆に、捕虜として検閲と自己検閲を行いながら、交渉拒否の立場で団結した党を説得しなくてはならない。しかしその説得が無視され、手紙がモーロのものではありえないと宣言されてしまったことに、やはりモーロと他のキリスト教民主党幹部との「謎めいた相関関係」が働いていた。

パゾリーニにとって理解不可能なモーロの言葉、シャーシャの言い方をすれば、「なにも言わない」モーロの言語は、空洞化した権力が身につけた仮面の言語であり、情報は効率よく伝達

するが、仮面の下にある人間を表現するものではなかったと考
えられる。そのことよって人質となったモーロ自身が一番苦
しめられたらうとシャーシャは推測する。

四 ボルヘスとシャーシャ 「永遠的客体」としての文学

『モーロ事件』は、もっともパゾリーニ的であると同時に、
パゾリーニから遠く離れた作品であるとマッシモ・オノーフリ
は言う⁹⁰。「国家による犯罪」の告発やキリスト教民主党に対
する非難、「国家体制」への批判は、すでにみたように一九七
五年のパゾリーニの一連の文章で繰り返されるテーマである。
七五年にシャーシャはシチリア州議会に共産党から立候補して
当選しその後辞任するが、モーロ事件後の七九年には急進党の
名簿から立候補して下院に当選し事件の解明委員会に参加する
など、執筆活動だけでなく政治の世界に直接参加する姿勢を示
す。友人パゾリーニの死がそうした変化に影響を与えていたこ
とをソフリは指摘して、シャーシャの発言を引用している。

私たちの言うことはほとんど同じだったが、ただ私の声
は小さかった。彼「パゾリーニ」がいなくなってしまうと、
私は自分が前より大声でしゃべっていることに気がつい
た⁹¹。

こうした社会的告発、体制権力批判の姿勢は共通しながらも、
パゾリーニとの相違点、つまりシャーシャのアプローチの違い
を象徴するのが、『モーロ事件』の三章目に登場するボルヘス
の名前である。ボルヘスに対して否定的評価を下したパゾリー
ニとは対照的に、シャーシャは、カルヴィーノ、エーコ、タ
ブッキらと共にボルヘスを愛好したイタリア作家に属する⁹²。
ここで引用されるボルヘスの短編『ドン・キホーテ』の作者
ビエール・ムナルル⁹³がどのようにモーロ事件と関係するの
かを見てみよう。

まずシャーシャは、ボルヘスの短編の着想として、ミゲル・
デ・ウナムーノの『ドン・キホーテとサンチヨの生涯』の執筆
をあげる。ウナムーノの作品は、セルバンテスの『ドン・キ
ホーテ』に対する一種の注釈であり、それ以後の読者はウナ
ムーノの解釈を通じてセルバンテスの作品を読むことになり、
ウナムーノの存在を意識しなくてもその影響を逃れてはいない。
ムナルルの書いた『ドン・キホーテ』はセルバンテスのものと
まったく同一でありながら、ふたつの時代の差があるために
まったく別の作品になる。モーロ事件についても、誘拐直後に
書かれた文章が、シャーシャの執筆時点で振り返ってみれば異
なる視点から読まれてしまう。モーロ誘拐から「モーロの不
在」がもたらす影響へと重点が変わる。しかしこれはあくまで
表層的なものであって、シャーシャが問題視するのは、なぜム
ナルル式にすべてを忠実に再現することしかできないのか、事

件がすべて完成された文学作品であるような印象を与えるのはどうしてなのである。その理由のひとつは、現実の歴史的情況のなかで起きた非現実的な事件であり、まるで文学から派生したようだからだとしている。例として、パゾリーニの名前のほかに、シャーシャ自身の作品『権力の朝』（一九七二）『トード・モード』（一九七四）を挙げる。

『権力の朝』は、ある男が妻の殺害を企てたとして告発された実在の事件をもとに、「推理小説のクリシエ」を用いてシャーシャが作り上げた「パロディ」である。自分に誤審を下した判事たちを次々に殺害する男クレスを追いかけるロガス刑事は、国家権力者によるクーデター計画に気がついて、しだいに容疑者クレスを自分の分身のように感じ始める。「追う者と追われる者」の同一化の遊びが、思想も原理原則もなくただ権力の保持だけが目的とされる国家を描き出すようになり、権力についての寓話へと変化するにつれて、「私は面白がって書き始めたのに、終わった時には面白くなくなっていた」と作者は注釈を締めくくる。

『トード・モード』の舞台はホテルに改装された修道院で、経営者の老獪な神父ドン・ガエターノの影響力の下にある政財界の大家たちが「心靈修業」を口実に集まって権力の分配を相談する。ホテルに居合わせた語り手の画家は連続殺人事件を目撃して、素人探偵役を果たすことになる。シャーシャには珍しい一人称の語り手は最後まで自分の名を明かすことがなく、

最後の三件目のドン・ガエターノ殺害の犯人でもあるらしい。

クリステイの『アクロイド殺し』を初めとする推理小説のパターンを模倣しつつ最終的な解決を示さない「開かれた終わり」の作品であるが、中心はドン・ガエターノと語り手の対立的な共犯関係にある。両者とも自分が手に入れた権力と名声を冷笑しており、俗悪な支配階層への反発と嫌悪を隠さない。正反対ながら自己の分身のようなドン・ガエターノに対して、語り手は魅力と嫌悪を同時に感じていて、その一種の宗教的な「誘惑」から解放されるために殺害したように見える。パゾリーニはこの「形而上学的推理小説」を、三十年間にわたるキリスト教民主権力のメタファーでもあるとして、最良のシャーシャ作品だと高く評価した²²。

六九年以来激化するテロ事件、社会運動の盛り上がりと平行して高まる右翼クーデターへの隠れた期待、七六年のロッキード事件を頂点とするキリスト教民主の政治汚職やマフィアとの癒着スキヤンダルを背景に、与党キリスト教民主と野党第一党である共産党との接近が画策される七〇年代前半の社会現実、これらシャーシャの作品をまるで追いかけているようであり、七八年のモーロ殺害につながっていく。自分が作品で描いていた殺人を模倣するような現実を目の前にして、作家が精神的にショックを受けたことは間違いない。モーロ事件以降のシャーシャは「すでに起きてしまった」歴史的事件の再構成に向かうようになり、現代の「起こりうる」事件を書くことから

遠ざかる。モーロ事件の後のインタビューでシャーシャはそうした恐れを表現している。

想像するのが恐くなりました。モーロのせいで私の人生が変わると十年前に言われたら笑い飛ばしていたでしょう。でも実際にそうになりました。モーロが死んだ後では、私は自由な想像ができない気がします。それもあって、すでに起きてしまったことを再構成するようになりました。起こるかもしれないことを語るのが恐いのです²³。

ドン・キホーテが騎士道文学から生まれたように、モーロとその事件がある種の文学から生まれたというのであれば、ポルヘスの『ドン・キホーテ』の作者ヒエール・ムナル』を持ち出すまでもなく、セルバンテスの『ドン・キホーテ』だけで充分に思える。しかし、シャーシャが主張するのは、いくつかの文学作品が現実を与えた影響関係、たとえば左翼テロに何らかの示唆を与えた可能性というよりも、批判も内省もないイタリア政界の現状では現実に対する総括が予言に見えてしまうということだ。

つまり真実は文学に委ねられる。・真実が日常的なかに過酷で悲劇的なものとして現れ、それを無視することも歪曲することも不可能となると、真実は文学から生じたよう

に見えた²⁴。

現実を芸術に投影するリアリズム文学、あるいはモーロ事件の「真相」を説明するジャーナリスト的な探求とは異なり、ここでシャーシャの主張する文学がもたらす真実はかならずしも現実と完全に一致するとは限らない。むしろ、非歴史的な永遠性をもつなかであり、歴史的現実と食い違ったとしてもその「真実性」は損なわれないとシャーシャは考える。原子物理学者の失踪事件を再構成した一九七五年の『マヨラナの失踪』でも、当時マヨラナが核爆弾の可能性を予想できたかどうか、あるいは厭世自殺であったかどうかにかかわらず、物理学研究から身をひいて修道院に隠棲した科学者の物語は、科学者の倫理性に対する作家の主張からみて、「真実」なのである。文学は、真実がとりうるもつとも絶対的な形式であると、作品を書き上げたシャーシャは確信した²⁵。『モーロ事件』の執筆を通じて得た同様の文学観をシャーシャはこう表現する。

それでは文学とはなんなのか？ それは複数の「永遠的客体」(あつかましくもホワイトヘッド教授の言葉を使うが)から成るシステムだ。真実という光に照らされて、それらの客体は輝いたり陰ったり、予想できない変化と交替を繰り返す。ちょうど太陽系のように²⁶。

パオロ・スクイツラチョーティが指摘するボルヘスの『異端審問』の一文「コルリッジの夢」との類似が、この表現を理解する手助けになるかもしれない。⁷⁷ フビライ汗が建てた王宮を夢に見たコウルリッジはそれから詩を作る。一方でそのフビライ汗もまた自分が夢に見た王宮を建造させていた。この奇妙な符合についてボルヘスは説明する。

まだ人間に示されていない一つの原型、ホワイトヘッドのことは言えば、永遠の客体 が、徐々にその姿を世界に現わしつつあるのかもしれない。その最初の姿が宮殿であり、第二の姿が詩であった。両者を比較した者は、それが本質的に同じものであることがわかったであろう。⁷⁸

文学が、現実を追いかけて写しとつたものではなく、その時々
の真実の光に照らし出されてわたしたちの目の前に現前する
「永遠の客体」だとすれば、現実から文学が、あるいは文学から
現実が生まれるという因果関係ではなく、現実と芸術のあい
だでの適合の瞬間、そのふたつが統合される瞬間こそ文学に託
された真実が明かされる。

それではどのようにして作家はその真実に到達するのだろうか。一九七四年のソッシ判事誘拐を實行した「赤い旅団」が黒（右翼）ではなく赤（左翼）であるとただ一人正しく指摘したシャーシャの推察を、ジャーナリストのジョルジョ・ボツカは

「文学者の直観」と呼ぶ。シャーシャはそれを、分析抜きで総合へ達する能力、感情や象徴、寓意によってマキャヴェッリのいう「物事が実際にもつ真実」を総合として表現する能力だと考える。しかしそれだけではない。そうした能力が日々の事象に対して行使されるには、あらゆる形式の既成権力からの自由経済・思想・文化・感情の利害からの解放が前提条件になる。

シャーシャは、現実からの乖離としての文学・芸術を認めない。作家、芸術家は芸と技巧によって人を感動させたり説得するが、「事態が実際にもつ真実」とは別の異なるものだという考えが、『モーロ事件』に対する批判として使われた。当初は、モーロの手紙の信憑性という「内容」について疑義を挟んでいたジャーナリストのエウジェニオ・スカルフアリは、その後の調査でシャーシャの仮説が裏付けられると、『モーロ事件』の芸術的完成度、つまり「形式」に標的を変える。⁷⁹ もともとシャーシャが『モーロ事件』に取り組もうとしたきっかけは、モーロの友人たちがその手紙の書き手をモーロではないと否定する声明を出したときであり、なによりもまず公開された手紙に対して先入観を持たずに「素直に」読む必要性を強く感じていた。事件当時は、この書簡は「赤い旅団」の影響下でモーロが書いた文章と判断されてしまったからだ。

『モーロ事件』のボルヘスの引用に戻ろう。「文学者」自身、文学がこの現実を生みだしたような錯覚をもつただろうと認め、たシャーシャは、さらにボルヘスの寓話との比較を進める。

モーロ事件が文学のなかで起きているような印象を与えるのは、すべての細部があまりにも完璧に生じているためで、まるで想像による産物であって現実味に乏しいせいだ。警察の膨大な動員から判断すると、赤い旅団は、逃れられないはずの蓋然性の計算からまさに逃れた。それはたしかにありそうなこともしれないが、通常の現実感覚ではありえない。こうシャーシャは指摘している。

ちょうど、「言葉と想像力の惰性」に頼って偶然セルバンテスが書き上げた『ドン・キホーテ』をメナールが再現したように、蓋然性を超えた偶然の積み重ねからなるモーロ事件をシャーシャは「必然的に」再現しなければならぬのだが、モーロが発見されず悲劇的結果になった点は曖昧な非現実感があるとシャーシャは感じていた。そこから警官の捜査ミス、あるいはマスコミ報道といった細部がはたしてどの程度偶然だったのか、あるいは意図的な操作が働いていたのではなかったかという疑問を持つようになる。

五 クトゥーゾフとフォーマ 人物の相似関係

次の章の冒頭部分は、『戦争と平和』でトルストイが展開する、英雄的指導者から民衆へと焦点を移した歴史理論とよく似ている。つまり大事件のなかには、微少な事象が暗い中心、磁界の空所へと集まって形を成していること、細部は全体に、そ

して全体は細部にそれぞれ必然性と説明があるという考えである。この類似がまったく偶然でないのは、その直後に政治家モーロを『戦争と平和』の登場人物クトゥーゾフに喩えていることからわかる。頑固でねばり強く人間の弱みを把握し操作する術に精通しており、イタリア南部のカトリック主義に代々伝わる経験の持ち主であるモーロの行動が、疲弊しきつてはいるが知性や知識のレベルにはない「戦争の行方を左右するなにか」を知っている老司令官の戦術に比較される。

このクトゥーゾフとの比較を通じて、「国家の幻影」と人間モーロとの対立は、ナポレオンの気まぐれな神経質さと老司令官の行動の遅さの対比、さらには「共産主義独特な厳格さ」と従順ながら頑固なロシアの魂の対立へと結びつくことをソフリは述べている³⁰。モーロとキリスト教民主党にはそれまで強い国家意識などなかったのに、誘拐事件直後から、党は「民主主義国家防衛」のスローガンを振りかざし、モーロに「大政治家」のレッテルを張る。そしてまさにモーロの駆け引きのおかげで政府に参加できた共産党が、「極左組織」「赤い旅団」との関連で非難を浴びることを避けて党の「合法化」を優先したため、モーロ救出交渉に反対する強硬の立場を貫いた。より強い国家主義意識を持つ共産党がキリスト教民主党の家族主義を圧倒してしまったように見える。

さらに『戦争と平和』を読んでいくと、ふたりの行動方針の他にも類似が見えてくる。「果敢実行の敵であり、忍耐と時を

標語とする「クトゥーゾフは、できるだけ被害を最小限にしてナポレオン軍をロシアから追い出す」という目標を達成する。しかしフランス軍を外国まで追撃する段階になると、周囲はかれを無能な老いぼれ扱いして司令部から追い出してしまふ。トルストイのクトゥーゾフは自分の「使命」が終わったのを悟って半ば自発的に引退する。モーロは「赤い旅団」の獄中から自分の健在ぶりをアピールしようとするが、党の友人たちから見捨てられ、パゾリーニのいう権力の「宮殿」の一室に一人取り残される。

しかしどこまでクトゥーゾフとモーロの類似が成立し、どこから分岐するのかについては読者が自分で判断を下さなければならぬ。『戦争と平和』のクトゥーゾフのように、ある特定の文学作品の登場人物の引用をめぐる興味深い例が一九七七年の小説『カンディード』にみられる。カトリック教会と共産党という二大組織からの思想的解放を描いた作家の精神的自伝の一種であるこの作品のなかで、主人公のカンディードはすべての行動においてその「純真」ぶり、つまり社会的不適合性を發揮して、周囲に損害を与える。共産党集会でカンディードを利己主義、見せびらかしだと批判した党幹部に対して、カンディードは「あなたはフォーマー・フォミツチみたいなしゃべり方をした」とだけ答える。党幹部はその場では名前を知っているふりをするが、二日にわたって頭を悩ませたあげく、ようやくそれがドストエフスキーの喜劇小説『スチエパンシコヴォ

村の人々』に登場する人物だと突きとめる。フォーマーは居候をしていた一家の純真さにつけこんで、道化から自己中心的な暴君としてふるまう偽善者である。周囲からはフォーマーというあだ名を付けられたかれにとつて、フォーマーは単なる蔑称でありカンディードが皮肉った名前に過ぎない。その一方でカンディードは、そのフォーマーという人物像をめぐって、教師であり年上の友人であるドン・アントニオと議論をする。否定的な人物ではありながら、ドストエフスキーはそこに肯定的な何かを与えたと主張するドン・アントニオに対して、カンディードは、結果的に最終的にフォーマーが皆にもたらした幸福はかれがいなければもつと早く実現していたと反論する。若い時に文学的野望に破れ、將軍のもとで屈辱的な体験を受けたフォーマーが、偶然にもある家族全体を支配する立場になり、傍若無人なふるまいをするという物語を、スターリンとスターリン主義の予兆と見るドン・アントニオに対して、カンディードはむしろ、スターリン亡き後の脱スターリン主義者たちの戯画像を見てとる。

この挿話は、『モーロ事件』におけるモーロとクトゥーゾフの喩えにかぎらず、シャーシャの小説に頻繁に登場する引用に対する示唆を与えてくれる。シャーシャの人物達が予想外に思いがけないほど物知りで、読者からみて理解しがたい飛躍があるように思われても、それはベダントリーの現れや韜晦を意図したものでない。シャーシャはカンディードと同じような

「純真さ」で固有名詞をひきあいだしている。「フォーマー」という名が、党幹部とカンティード、ドン・アントニオの三人それぞれにとって別の「意味」を持つように、クトゥーソフとモーロの類似はなにか特定の性質だけに限られはしないし、たとえ作者が意図しなかつた類似だからといって「真実」ではないとは言えない。「永遠的客体」である文学に思いもよらない仕方で真実の光があたるように、こうした文学的比喩の射程は予想を超えた広い範囲に伸びていると考えるべきだろう。

六 終わりに 哀れみの感情とヘシミズム

シャーシャの多くの作品に共通するモティーフが、凶暴な権力と個人の対立の図式である。マフィアの非合法組織の権力、あるいは警察・政治・司法の国家権力、ローマ教会や共産党のような宗教、思想の権力。主人公はその圧力にうち負かされることもあれば、『真昼のふくろつ』、殺人という極端な行動に走ったり、『権力の朝』、『トード・モード』、まれに自由になつたりする(『カンティード』)。党首脳の座から一転して「裸の人間」へと変貌したモーロのピランテック的ドラマにシャーシャは惹きつけられた。公開されたモーロの手紙を歴史史料のように細かく分析し、解釈を加えるシャーシャは、このテキストに対して最大限の敬意を払っている。死を語ることを自分のテーマだとする作家にとって、死を目前としたモーロが残した

言葉は文学作品と同じ重みをもっていたように思われる。

人間性よりも国家原理が優先された悲劇を非難する『モーロ事件』を通じ、宗教的感情、キリスト教的「哀れみ」を再発見したとシャーシャはインタビューで述べている。

作家も自己矛盾することがあります。わたしの場合、哀れみについて意見を変えました。二十年前には、政治社会の事に関して哀れみを抱くべきではないと書きました。しかしモーロ事件に際して、哀れみがもつとも崇高な感情であると認めました。ただ、言っておかねばならないのは、二十年前には、社会は変化しようと思っていたのに、今は私はそう考えていないことです³¹。

モーロの遺体の場所を告げる赤い旅団の電話連絡のなかに、モーロへの哀れみをシャーシャは読みとる。当時、テロリストの心に哀れみが生じるなど考えるのは、モーロの手紙が本人のものだと主張するのと同じくらいスキャンダラスなことだった。しかし作家は「テロリスト」や「大政治家」といった仮面を剥ぎ取り、政治思想的な先入観を捨ててそこにいる人間そのものを見ようとする。非人間的な権力を弾劾する政治パンフレットの根底には、見捨てられた孤独な男モーロに対する深い宗教的、実存的同一化があるといえる。ただしそのために、啓蒙主義者としての社会変革の期待を放棄しなければならなかつ

たのだとすれば、この後のシャーシャが味わったヘシミアムは相当なものだったはずだ。その点で『モーロ事件』は文学観だけでなく、作家の人生観そのものに影響を残した作品だと言えるかもしれない。

注

- 1 ステーファノ・ターニ『やぶれなざる探偵』高山宏訳、東京書籍、一九九〇年。
- 2 Leonardo Sciascia, *Opere 1971±983*, Bompiani, Milano 2001, p. 1181. (以下 *Opere 71±83*)
- 3 邦訳レオナルド・シャーシャ『モーロ事件 テロの画家』千種堅訳、新潮社、一九七九年。事件詳細に関する邦訳資料として以下を参照。ロバート・カッツ『首相暗殺』リック・タナカ訳、集英社、一九八九年（一九八六年ジュゼッス・フェラーラ監督により映画化され、邦題『首相暗殺』としてクラウン・レコードからビデオ発売）。伊藤公雄『光の帝国』迷宮の革命 鏡のなかのイタリマ』青弓社、一九九三年、「第二章 迷宮のなかの革命」。
- 4 Leonardo Sciascia, *Opere 1956±971*, Bompiani, Milano 1987, p. VIII. (以下 *Opere 56±71*)
- 5 *Opere 71±83*, p. 514.

- 6 *Opere 71±83*, p. 514, p. 537.
- 7 Cfr. Paolo Squillacioti, "Dltre la filologia. Un approccio all' AF-FAIRE MOROJ in *Da un paese invisibile, Quaderno Leonardo Sciascia 4*, La Vita Felice, Milano 1999, p. 86.
- 8 *Opere 71±83*, p. 565.
- 9 ステーファノ・ターニ『前掲書』六七七頁。
- 10 ふたりの關係に「こつち」 Giuseppe Traina, Un vero, forte e commosso senso di fraternità a proposito di Sciascia e Pasolini, in *Il piacere di vivere, Quaderni Leonardo Sciascia 3*, La Vita Felice, Milano 1998, pp. 9–24.
- 11 *Opere 71±83*, p. 468.
- 12 Adriano Sofri, *Altri Hotel*, Mondadori, Milano 2002, pp. 238±41.
- 13 Pier Paolo Pasolini, *Saggi sulla politica e sulla società*, Mondadori, Milano 1999 版 (以下 SPS)° *SPS* の標題に「初冊」を冠す。L'articolo delle lucciole (1975/21 *Corriere della Sera*), pp. 40±11, Fuori dal Palazzo, (1975/8/1 *Corriere della Sera*), pp. 618±23, Bisognerebbe processare i gerarchi Dc (1975/8/28 *Il Mondo*), pp. 634±8, Il Processo (1975/8/24 *Corriere della Sera*), pp. 639±48, Perché il Processo, (1975/9/28 *Corriere della Sera*), pp. 668±73.
- 14 SPS, p. 410.
- 15 *Opere 71±83*, p. 471.
- 16 Pier Paolo Pasolini, "Altro articoloJ in *Saggi sulla letteratura e sull'arte*, Mondadori, Milano 1999, p. 1283. (以下 SLA)

- 17 Leonardo Sciascia, *Quaderno*, Nuova editrice meridionale, Palermo, 1991, pp. 36±7, ora in Massimo Onofri, *Storia di Sciascia*, Laterza, Roma+Bari 1994, pp. 214±5.
- 18 SPS, p. 136.
- 19 Massimo Onofri, *Sciascia*, Einaudi, Torino 2002, p. 107.
- 20 Adriano Sofri, *op. cit.*, p. 152.
- 21 Paolo Squillaciotti, ¹¶ltre la filologia. Un approccio all'AFFAIRE MOROF in *Da un paese invisibile, Quaderno Leonardo Sciascia 4*, La Via Felice, Milano 1999, pp. 101±2. Roberto Paoli, *Borges e gli scrittori italiani*, Liguori, Napoli 1997.
- 22 Pier Paolo Pasolini, ¹¶leonardo Sciascia, ¹¶todo modof, in SLA, pp. 2217±24.
- 23 Matteo Collura, *Il maestro di Regalpetra*, TEADUE, Milano 2000, pp. 270±1.
- 24 *Opere 71±83*, p. 479.
- 25 *Opere 71±83*, p. 834.
- 26 *Opere 71±83*, p. 830.
- 27 Paolo Squillaciotti, ¹¶ltre la filologia. Un approccio all'AFFAIRE MOROF in *Da un paese invisibile, Quaderno Leonardo Sciascia 4*, La Via Felice, Milano 1999, p. 103.
- 28 ホル・ルイス・ホル・ルス『異端審問』中村健一訳 晶文社 一九八二 三〇頁
- 29 *Opere 71±83*, pp. 832±4.
- 30 Adriano Sofri, *op.cit.*, p. 244.
- 31 Matteo Collura, *op. cit.*, p. 267.